

# 教室の内と外をつなぐ

## —〈本×物〉Project の実践報告—

道園 達也<sup>1\*</sup>

Connecting Inside and Outside the Classroom  
 : Report on the Practice of introducing Books using Objects  
 Tatsuya Michizono<sup>1\*</sup>

Japanese education requires a shift toward learner-centered learning. As indicated in the MCC of KOSEN, it is essential for students to acquire linguistic and cultural literacy and proactively engage in effective, interactive communication. Achieving that goal requires diverse approaches and practice. This report details one such practice. Students select books based on their own interests outside the classroom. Then, inside the classroom, students introduce those books to each other using objects. By connecting inside and outside the classroom, we aimed to achieve our goal.

キーワード：学習者主体の学び、教室の内と外

Keywords : learner-centered learning, inside and outside classroom

### 1. 背景と目的

現在の日本はコロナ禍を経てデジタル化の進展、生成AIの普及、そして少子化という変化が急速に進みつつある。社会の変化に応じて今教育に求められているのは「何ができるようになるのか」という学習者主体の学びへの転換である。国立高等専門学校のモデルカリキュラム(以下、MCC)<sup>(1)</sup>が目指すのも、時代の変化に応じた学びの場を作ることであろう。

MCCにおける国語の「到達目標」は次のとおりである。

人間性の基盤となる言語的・文化的教養を身に付け、自ら進んで効果的かつ対話的なコミュニケーションを実践することで、多様な他者を深く理解し、変化する状況にも柔軟に対応する言語能力や専門分野に関わる日本語の運用能力の向上を目指す。

MCCに示されている「人間性の基盤となる言語的・文化的教養を身に付け」とともに「自ら進んで効果的かつ対話的なコミュニケーションを実践する」ための学びの場を作るには多様な工夫と実践が欠かせない。

以上の背景と目的を踏まえ、本レポートでは「教室の内と外をつなぐ」と題して熊本高等専門学校(以下、熊本高専)八代キャンパスにおける〈本×物〉Projectの実践を報告する。

私たちが本を読むのは楽しむためであり、知りたいことや考えたいことの手がかりを得るためにあろう。本実践に

おいて、学生は教室外で自らの興味関心に基づいて本を選ぶ。そして、教室内で〈物〉を用いて本を紹介しあう。そうすることによって教室の内と外をつなぎ、「言語的・文化的教養を身に付け」ことと「効果的かつ対話的なコミュニケーションを実践する」ことを促す取り組みである。

### 2. 〈本×物〉Project の授業実践

#### 2.1 授業の内容と配当時間

〈本×物〉Projectは令和7年度本科3年「国語III」(必修2単位・通年30回/1コマ90分)で実施した。学生数は機械知能システム工学科44名、建築社会デザイン工学科42名、生物化学システム工学科41名である。いずれのクラスも雰囲気はよく、課題にも前向きに取り組んでくれる学生が多い。

〈本×物〉Projectは前期第10回～第14回の計5回を当て、クラス別に表1のような内容と配当時間で実施した。なお、第10回の単元テスト、第11回～第14回の語彙力小テストの記載は省略した。配当時間は単元テストが約30分、語彙力小テストが約20分である。

表1 授業の内容と配当時間

	内容(配当時間)
第10回	文章問題の解答と解説(30分) 説明と発表のサンプル(30分)
第11回	情報収集と資料作成(70分)
第12回	情報収集と資料作成(70分)
第13回	発表会(70分)
第14回	発表会(70分)

1 基幹教育部門  
 〒866-8501 熊本県八代市平山新町2627

Faculty of General Education  
 2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501  
 \* Corresponding author:  
 E-mail address: mitizono@kumamoto-nct.ac.jp (T. Michizono)

## 2.2 文章問題の解答と解説

令和7年度「国語III」では読解力養成のために『〈三訂版〉評論速読トレーニング 1500』(数研出版)<sup>(2)</sup>を使用している。同問題集は1000~1500字程度の文章が24編収録され、各文章につき2問が用意されている。標準解答時間は読解3分、解答3分で計6分である。授業では6分をタイマーで計り、読解と解答に取り組んでもらい、終了後に指名読みと解説をおこなっている。

本年度前期では4編の文章を取り上げた。そのうち第10回の授業で扱ったのは鈴木謙介『ウェブ社会のゆくえ』<sup>(3)</sup>である。筆者は「ソーシャルメディア」の現状を「現実空間を多孔化し、資源化する動き」と捉え、「ウェブが作り出した現実と、そうでない現実」に対して「どちらが『ほんもの』かではなく、どちらが自分にとって、社会にとって大事なのかを、私たち自身の判断として選び取らなければならぬ」と主張している。筆者の主張について文章構成を踏まえて確認した。

その後、発表会に向けて鈴木謙介『ウェブ社会のゆくえ』を〈本〉として選んだ場合の例を示した。図1の発表資料のサンプルをスクリーンに映し、口頭発表をおこなった。使用した〈物〉はスマートフォンである。スマートフォンは現在のウェブ社会における最有力のツールであり、学生にとって身近で容易に理解できる〈物〉であると考えたからである。

資料作成の注意点として、以下の4点を説明した。

1つ目にタイトルは紹介する本の書名をそのまま使うことがないように「いい感じ」に付けてほしいということ。

2つ目に本の基本情報として著者名と書名および出版社(出版年月)を記載すること。

3つ目にサンプルで示した書影は紀伊國屋書店ウェブサイトからコピーしたこと、ただし、その掲載は必須ではないこと。

4つ目に本文からの引用はサンプルにおいて青枠で囲ったように引用であることが分かるように示し、ページ数を必ず添えること。

発表時間は2分程度(1~3分)とした。配点は発表資料10点、口頭発表10点とし、後者について指定時間を超過した場合は減点することとした。発表時には発表者が視認できる位置にデジタル時計を設置した。

### 私たちの生きる〈現実〉について

著者：鈴木謙介

書名：ウェブ社会のゆくえ 〈多孔化〉した現実のなかで

出版社(出版年月)：NHK出版 (2013/8)

リアル=ほんもの バーチャル=にせもの 二項対立



私たちはいまや、ウェブが作り出した現実と、そうでない現実の両方に足をかけながら、両者の優先順位を判断し、どちらをより重要だとみなすかを考えながら生きていかなければならないような、そういう時代の中にいる。どちらが「ほんもの」かではなく、どちらが自分にとって、社会にとって大事なのかを、私たち自身の判断として選び取らなければならぬのだ。(p.58)

図1 発表資料のサンプル

また、〈物〉については発表のために新しく購入する必要は全くないこと、使いたいと思う〈物〉そのものが手元にない場合は何か別の〈物〉をそれとして使用するという見立ての方法を活用することを伝えた。見立ての方法については簡単な説明を加えた。

残りの時間でくじ引きによって発表順を決めた。発表資料の提出締切は各クラス第12回の実施日とした。

## 2.3 情報収集と資料作成

情報収集と資料作成をおこなうのは教室でも図書館でも良いこととした。ほとんどの学生が図書館を利用したようである。中には気になる本を複数冊借りて来て教室で目を通したり、インターネットで検索しクラスメイトと情報交換したりする学生もいた。学生からの質問・相談には適宜対応した。大半の学生は授業時間内の計140分に加えて放課後の時間も情報収集と資料作成に当てたようである。発表した学生は全員が事前に資料を提出した。

## 2.4 発表会

発表会では予想以上に多様な〈本〉が紹介され、〈物〉の示し方も工夫が見られた。授業担当者として非常に楽しく刺激的な時間を過ごすことができ、この時代を生きる学生の興味関心の対象、人生観や価値観などについて多くの気づきがあった。

表2は学生の発表例として9件を選び、それらの概要をまとめたものである。〈本〉の欄には発表タイトルを下線で示し、→に続けて本の基本情報を学生作成の発表資料に基づき、必要な場合一部修正して記載した。[]で示したのは発表後の振り返りで工夫したところとして回答された内容である。また、〈物〉の欄には発表後の振り返りで提出してもらった写真を掲載した。

AとBは〈本〉の内容を自らの経験に深く関わる〈物〉を用いて紹介し、いずれも好印象の発表であった。

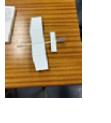
Cは「学習における横断的な学び」をタイトルとした発表である。〈本〉の紹介は物足りなさもあったが、中学生の時に参加したオープンキャンパスで製作したというキーホルダーを〈物〉として使用、学びの連続性を感じさせた。

Dは〈物〉の見せ方を工夫、E~Hは手作りしたもの用いることで興味を惹く発表であった。

Iは生成AIの進化・普及を背景に「問い合わせの設定力」の重要性を確認している。それを「まっさらな紙」で表現したところ、優れた発想と工夫を感じさせた。

以上一部の発表概要であるが、紹介された〈本〉について、おおよその全体的傾向を言うとすれば、自己啓発などテーマを絞り込んで読みやすく書かれた本がもっと多く、次いで小説であった。

表2 学生の発表例

	〈本〉	〈物〉
A	<p><u>自分に勝つために</u>→内田玲子『ほんとうに大切なこと—今日を生きる100の言葉』(アートヴィレッジ、2020・12)</p> <p>!!自分がいつも使っているレース水着と本の言葉を、経験などを通して関連させた。</p>	
B	<p><u>音楽は日本人にとってどのような存在</u>→小島美子『音楽から見た日本人』(NHK出版、1997・7)</p> <p>!!自分にとって音楽はどのような存在であるか、どのように触れてきたかを今まで習ってきたピアノに置き換えて、楽譜を見せて自分にとっての音楽の存在価値を示しました。</p>	
C	<p><u>学習における横断的な学び</u>→河川財団『河川・水の学び—生きる力をのばす教育』(教育出版、2024・11)</p> <p>!!全体を見てもなにか分からぬものは要素をそれぞれ理解していくことによって大まかな全体としての役割を理解できる、ということを表すために持ってきた物だ。この物で例を出すなら、キーホルダーを見ただけでは何ができるものか分からぬものだ。しかし、要素を見ていくと、抵抗の値を調整する機能やスイッチ、電源、電源と抵抗を繋ぐコード、ハンダ付、LEDなど少しでも理解することのできる要素がたくさんある。これが分かれば全体としてスイッチを入れて、つまりを回すことによってLEDの光る間隔を変えることができるものという風に理解できる。</p>	
D	<p><u>上手に休むとは</u>→群像編集部『休むヒント』(講談社、2024・4)</p> <p>!!発表の始め方に困っていたので、「寝る」という言葉から「休む」という言葉に繋げるために寝ている人形を使った。寝ている人形を使うことでイメージしやすいと思った。</p>	
E	<p><u>美と猫</u>→森博嗣(作)／佐久間真人(画)『猫の建築家』(光文社、2006・12)</p> <p>!!紙を使って猫を手作りしたところです。まずいらなくなつたプリントで形を作つて、白い紙で包みました。目はあえて書いてないのがポイントです。</p>	
F	<p><u>優しく、切ない話</u>→ダニエル・キイス『アルジャーノンに花束を』小尾美佐訳(早川書房、2015・3)</p> <p>!!なかなかキーとなる物が出てこないので、迷路を自分で制作した。</p>	
G	<p><u>小学生の頃何をしていたか覚えていますか</u>→小野不由美『緑の我が家』(KADOKAWA、2022・10)</p> <p>!!売つてなかつたので自分で作つた。</p>	
H	<p><u>後悔しない選択</u>→住野よる『また、同じ夢を見ていた』(双葉社、2018・7)</p> <p>!!実際の物がなかつたので、紙に印刷して丸めました。紹介した本が時間と夢に関連があつたので、有限と無限の時間を象徴する砂時計にしました。</p>	
I	<p><u>AI社会における〈問題提起力〉について</u>→鳥潟幸志『AIが答えを出せない問い合わせの設定力』(クロスメディア・パブリッシング、2024・4)</p> <p>!!「物」として、まっさらな紙とペンを用いました。自分の力でゼロから生み出す問い合わせは、このノートに書きだすように自ら設定するものです。筆者はAIがどんなに進化しても「答えを出せない」領域があると述べています。それが「問い合わせの設定力」です。この「まっさらな紙とペン」は、まさに「問い合わせの設定力」を象徴していると考えました。</p>	

### 3. 学生の振り返りから

第13・14回の発表会を終え、前期定期試験を挟んで第15回の授業では主に前期の振り返りをおこなった。発表後の振り返りに續いて、前期の振り返りでも改めて〈本×物〉Projectの取り組みを通して感じたこと、考えたことを回答してもらった。なお、原文の改行は「／」で示し、明らかな入力・変換ミスは修正した。

- a) 本の内容の紹介をするのはそこまで難しいことではなかったが、モノを使わないといけないのが難しいと感じた。本の中に出でたものやその本質と類似するものを見つけるには、やはり本の内容:主にその主題を理解してイメージ(具体化)ができる必要があるからだと思う。今回の僕の発表では本・物プロジェクトから少しづれるような発表になってしまったと思っているが、今後は失敗を活かして抽象と具体を用いるプレゼンを行いたい。／また機会があればやってみたい。
- b) どんな「物」を使えば本の魅力が伝わるのかを考える過程で、あらためて作品のテーマや登場人物の心情、背景について深く読み取ろうとする姿勢が必要だったので、単に読むだけでは気付けなかった視点や、本のメッセージをより強く感じることができました。
- c) 物と本を組み合わせることにより普段何となく読んでいるだけの本が現実とよく関係して、空想だけの存在の本が現実に降りてきているような実感がありとても良い思考の場と思いました。
- d) 自分が発表した内容はロボット倫理学だった。発表するときに自分でそれをまとめなければいけないので内容を理解できた。将来自分の役に立ちそうな内容だった。
- e) 本物プロジェクトを始める前は、面倒だと思っていました。ですが、今回の学習によって本に触ると、今まで敬遠していた事が馬鹿らしく思えました。本を読むことは面倒だという考え方から、本から情報を得たり、感性を養ったりできるという考え方になりました。これからも本を読んだり、それから考えたりしていきたいです。
- f) 自分は普段からあまり本を読まない人なのですが、みんなの本×物プロジェクト発表を聞いていろいろな本があるのだと思った。人それぞれの好きなものがわかった感じがして、面白かった。物を使って伝えたいことを表現していてわかりやすかった。
- g) 概念を物に例えるのは人ごとに考え方の違いが見れて面白かった。同じ本を選んでいる人がいたが、2人とも違う物を選んでいて受け取り方は千差万別だと改めて感じた。／また自分の発表では概念という点で足りないとみんなの発表を見て思った。楽しかったのでリベンジしたい。
- h) 色んな人の発表を聞いて、みんなそれぞれその本に対する着眼点が違うと感じました。私は絶対この本をこういう風に捉えないというところが沢山だったので、

読んでみようと思う本が増えたため良かったです。

- i) 本物 Projectのために本を久しぶりに読みました。なかなか本を読む時間がとれないでの、課題として本を読むという時間がとれて本の良さ、物語の良さを改めて感じることができたと思います。／また、見立てるために本を読み返したり、この本の大事なところはなんだろうと考えたりして本に、より集中できました。／他の人の発表を聞いて、色々な本があるなと思いました。またたくさん本を読みたいと思いました。

学生による前期の振り返りから、今回の〈本×物〉Projectの効果として考えられることをまとめてみたい。

まず、〈物〉を用いることが〈本〉の読みを深めるきっかけとなっていること。a)やb)に「本の内容」を「理解してイメージ(具体化)ができる」と、「深く読み取ろうとする姿勢」の必要性が述べられている。i)の「この本の大事なところはなんだろう」というのも同様の姿勢の表れであろう。c)は「空想だけの存在の本が現実に降りてきているような実感」という独特の表現で捉えている。

次に、〈本〉を読むことが自らの興味関心を広げるきっかけとなっていること。d)は「将来自分の役に立ちそうな内容」であったことの確認、e)は「本から情報を得たり、感性を養ったりできる」という考え方への変化を記述している。

最後に、他者の多様性を理解し、さらに本を読みたいと思うきっかけとなっていること。e)～i)に見られるように「人それぞれの好きなもの」や「人ごとに考え方の違い」があること、「みんなそれぞれその本に対する着眼点が違う」ということの気づきがあり、それに触発されて「読んでみようと思う本が増えた」とや「たくさん本を読みたい」と思ったことが述べられている。

学生の振り返りから、学生一人ひとりが自らの興味関心に基づいて選んだ〈本〉を、〈物〉を用いて紹介しあう取り組みによって教室の内と外をつなぐことができたと言つてよいのではないだろうか。大切なのは学生が「言語的・文化的教養を身に付け」と「効果的かつ対話的なコミュニケーションを実践すること」である。学生一人ひとりの取り組みを促す学びの場を作るために、これからも多様な工夫と実践を積み重ねていきたい。

(令和7年10月 7日受付)

(令和7年10月 27日受理)

### 参考文献

- (1) 国立高等専門学校機構:「モデルコアカリキュラム」,  
[https://www.kosen-k.go.jp/nationwide/main\\_super\\_kosen](https://www.kosen-k.go.jp/nationwide/main_super_kosen)  
(2025.9.22閲覧)
- (2) 数研出版編集部編:「〈三訂版〉評論速読トレーニング1500」, 数研出版(2023)
- (3) 鈴木謙介:「ウェブ社会のゆくえー〈多孔化〉した現実のなかで」, NHK出版(2013)